

研究員の研究概要

昭和61～62年度

研 究 題 目	研 究 員
アジアにおける文化交流の研究 〈日中・日朝関係の研究〉（歴史研究班） 令集解の研究 近世対外関係史 対馬宗家史料による日朝関係の研究 難破唐船の記録の蒐集と研究 長崎薬種貿易の研究 来船清人の絵画	(幹事)泉 澄 一 奥 村 郁 三 園 田 香 融 横 田 健 一 橋 本 久 昭 林 本 紀 浩 典 水 本 浩 典 泉 澄 一 大 庭 脩 松 浦 章 宮 下 郎 山 岡 三 造
〈日中語彙交流の史的研究〉（言語研究班） 現代における文学語言 明治期における外来語 近世における唐話辞書考 現代における学術用語	(幹事)鳥 井 克 之 日 下 恒 夫 芝 田 中 謙 二 田 中 謙 二 鳥 井 克 之
東西文化交流の研究 〈東西神秘主義の研究〉（神秘主義研究班） 思想・哲学・宗教における神秘主義と交流 キリスト教と仏教における信仰と神秘主義の現象学的比較研究 西洋における神秘主義の比較研究 東洋における神秘主義の比較研究 文学・芸術における神秘主義と交流 演劇の交流史 近代文学論争譜 W. B. イェイツの神秘主義の研究 ジュリアン・グリーン神秘主義の研究 エズラ・パウンドの神秘主義の研究	(幹事)安 川 昱 M. J. オーガスティン 川 崎 幸 夫 丹 治 昭 義 D. F. シャウヴェッカー G. S. ジョンソン 谷 沢 永 一 名 取 栄 史 前 原 昌 仁 安 川 昱
〈東西文化交渉史の研究〉（文化交渉史研究班） 『諸蕃志』の研究 技術伝播の研究 日・中・欧間陶磁器貿易の研究 十字軍関係のアラビア史料の研究	(幹事)山 田 幸 一 藤 善 真 澄 藤 本 勝 次 角 山 幸 洋 山 田 幸 一 大 庭 脩 安 川 昱 C. J. A. ヨルグ 藤 本 勝 次 池 田 輝 修 梅 田 輝 世

アジアにおける文化交流の研究

〈日中・日朝関係の研究〉（歴史研究班）

『令集解』の研究

奥村郁三・藺田香融・横田健一
橋本 久・林 紀昭・水本浩典

『令集解』30巻（現存25巻）は、貞観年中（859—76）、惟宗直本の撰。養老令に関する詳細な注釈書で、日本古代法研究の最も基本的な文献であることはいままでもない。

本研究班は、昭和54年度の出発以来、各自分担を定め、輪講形式で研究を進めてきたが、昭和59年度からは、これまでの研究成果を踏まえて、くわしい「語句索引」を作成することになり、さまざまな試行錯誤を経て、60年度より具体的な作業に着手。現在までに、官位令（巻1）、職員令（巻2～6）の部分の語彙約7千の採集を終った。

『令集解語句索引』の作成要項は次の通りである。

- (1) 『新訂増補国史大系・令集解』（吉川弘文館刊、昭和41年完成記念版）を底本とする。
- (2) 語彙の採集範囲は、法令・官司・官職をはじめとする法制用語はもとより、地名・人名・典籍名などひろく一般事項を網羅しさらに音訓・助字についても採取する。
- (3) 索引は漢音引とし、五十音順に配列する。

本年度中には巻6までの語彙索引を完全なものとし、これを基礎として今後の作業の促進をはかってゆきたい。

本索引が完成すれば、日本及び中国の古代法制史研究に大きな貢献を果たすばかりでなく、ひろく日中の古代史や漢文学の研究にも少なからざる寄与を果たすことができるであろう。（藺田香融）

近世対外関係史

対馬宗家史料による日朝関係の研究

泉 澄一

対馬藩が寛永～寛保年間にかけ朝鮮釜山の倭館内で経営した陶窯いわゆる「釜山窯」について昭和54年度以来調査研究を行ってきたが、その集大成をめざして史料調査を重ね昭和61年10月『釜山窯の史

的研究』（研究叢刊5）を出版した。昭和60年8月には朝鮮側の史料収集のためソウル大学の奎章閣図書館にて調査を行なったほか、大韓民国国史編纂委員会、国立国会図書館・長崎県立対馬歴史民俗資料館で計10数回にわたり「宗家文書」の調査を行った。奎章閣図書館では朝鮮側の根本史料である『倭人求請騰録』（礼曹の典客司による記録で丁丑年3月～甲辰年4月に至る対馬藩からの各種の求請を東萊府・礼曹等の状啓をもとに伝えたもの）を調査し本研究に用いたが、国史編纂委員会ではとくに寛永～万治期の、釜山窯初期に関する史料の再点検を行なった。研究の詳細は『釜山窯の史的研究』によられたいが伊万里焼の朝鮮輸出の事実をつぎにあげておく。従来陶磁器及びその焼成の技術については日本・朝鮮間では朝鮮→日本へという一方的な流れしか考えられていない。しかし江戸時代初期以来対馬を介して大量の伊万里焼が進上品として朝鮮へ流出しなお安永年間には対馬産伊万里焼の輸出が行なわれていた。朝鮮に色絵付の技術がなかったためだが、かかる事実をふまえ焼物をめぐる両国の文化交流について今後の調査研究がのぞまれる。

難破唐船の記録の蒐集と研究

大庭 脩

享保時代は徳川吉宗を中心として中国文化に関する関心が高く、直接その流入を証する資料が多く残されている。昭和49年3月に刊行した資料集刊9に収めた唐船進港回棹録、島原本唐人風説書はその一部である。

今回は享保4年3月の「中華之儀ニ付申上候覚」、長崎の信牌方が記した「信牌方記録」（正徳5年—享保11年）、享保11年序の「和漢寄文」を合せ、『享保時代の日中関係資料1』と題して、資料集刊9—2として編纂刊行した。

前回は「近世日中交渉史料集」のサブタイトルを附しているため、今回はその2とし、なお享保時代の資料はなお多数存するので、時代順に第二、第三集まで編纂したいと考えている。

次に江戸時代に日本に漂着した中国船に関する資料の編纂については、安永9年に房州に漂着した沈

敬胆船についての資料を蒐集して刊行すべく準備中であるが、同船の副船頭であった方西園の画を山岡泰造研究員の努力によって集めており、それを収容すべく、なお出版を見あわせている。

難破唐船の記録の蒐集と研究

松浦 章

昭和60年4月より2ヶ年に渉る筆者の当該研究は、大庭脩研究員との共同研究による「難破唐船の記録の蒐集と研究」のもとに、本所資料集刊13-2として『文政九年遠州漂着得泰船資料』を刊行した。同書は田中謙二研究員が主要資料「得泰船筆語」（旧滝沢馬琴蔵写本）の訳注をされ、筆者は得泰船漂着に関する資料の収集を担当し、静岡県吉田町、和歌山県田辺市、京都府舞鶴市等を実地調査し、従来知られていなかった得泰船関係の資料を蒐集し解題を著した。

この他、共同研究と同時に個別研究を進め、中国域外に残された清代中国帆船の漂着資料の蒐集と研究を進めている。その一端として昭和60年6月、歴史班例会において「清末上海沙船の朝鮮漂着に関する一資料」と題し報告し（所報42号）、本所紀要17・18輯に発表した「李朝漂着中国帆船の「問情別單」について」上・下の追補を行なった。また、昨年和歌山県立図書館で蒐集した中国沿海商船の資料をもとに、本年度末刊行予定の本所紀要20輯に「清代沿海商船の紀州漂着について」として報告する予定である。

この他、内藤湖南博士が旧奉天（現、中国沈陽）の崇謨閣で発見された「朝鮮国王来書簿」の藍写真本（京都大学人文科学研究所蔵）を使用して、興起まもない瀋陽の太宗政権のもとに、日本「島原の乱」の状況が対馬・朝鮮を経て如実に伝えられていたことを明らかにし、近世対外関係史における東アジアの緊張した国際関係の一端を本所紀要19輯に報告した。

長崎薬種貿易の研究

宮下 三郎

漢薬という言葉が示すように、江戸時代の医薬品

は中国から輸入されるものが多かった。漢薬の輸入については長崎の貿易文書によってその一端を追跡できるが、まだ本格的な研究は現われていない。大庭教授の収集された永見文書の『薬種寄』のマイクロを中心に、資料の読解・分析に努めたが、この面では期間中に十分な成果を得られなかった。薬種輸入の基礎である医療の新しい方法として、18世紀半ば種痘法が長崎に実施された事績を中心に「種痘法の日中交渉」について、研究例会で報告した。延享3年（1746）長崎奉行・松波正房の命令で、中国人杭州府種痘科の李仁山が大村や長崎の日本人に接種した。この中国伝来の種痘法は、ジェンナー種痘伝来以前の江戸時代の各地に拡がり、毎年数千人に実施されていた。この新しい医療法が薬種の輸入に及ぼした影響についても、問題の解決を今後に残すことになった。

来船清人の絵画

山岡 泰造

来船清人画家は概してわが江戸時代の画壇に大きな影響を与えたが、とりわけ沈南蘋とその一派は決定的ともいえる影響を与えた。彼らの写実的かつ装飾的な画風は、実学的（科学的）で華美を好む町人階級の性向によく合致して、京における円山応挙・伊藤若冲・与謝蕪村ら、大坂の木村兼葎堂らの文人花卉画や森祖仙らの写生派、江戸の谷文晁・司馬江漢や浮世絵各流は、いずれも陰に陽に沈南蘋画風の姿を示している。そして長崎派と呼ばれる一派が、沈南蘋画風の伝達役を果たした。このような沈南蘋一派や長崎派の影響は、ひとり日本人の画家たちに対してだけではなく、来船清人画家たちに対しても少なからぬ影響を及ぼした。例えば方済は安徽省または福建省の出身といわれて、浙江の職業的画風を示す沈南蘋とは異なる軽淡あるいは粗放ともいえる画風を持っているが、花鳥画では南蘋画風への接近が顕著である。また方済との合作があって来船かとも思われる余崧は、蘇州の人で呉派文人画の伝統に則った花卉画も描いているが、方済との合作では、方済と区別のつかぬ画風を示し、方済の南蘋風に調子を合わせているが、他方で南蘋以上に華美な花卉

図巻を描いており、またその作品にしばしば「内廷供奉」や「曾經御覽」の印を用いて宮廷画家であったかに装っている。張昆（秋谷）と張華（秋穀）を同一人と見做し、画風の違いを日本人の趣好に合わせたものとする説も、あり得ることと思われる。

〈日中語彙交流の史的研究〉（言語研究班）

現代における文学語言

日下 恒夫

現代における文学語言というテーマは、近代北方語史の中で位置づけられたものであり、当面の対象は、中国現代文学の作家中ほとんど唯一の北京語作家、老舎の作品である。その言語と文体の記述の前提として、最近数年間は、作家自身に関する調査、すなわち年譜および書誌などを作成中である。その一部は『日本における老舎関係文献目録』（朋友書店）、『老舎年譜』『老舎著書目録』（学研）として出版したが、現在は、前者の改訂と研究史をまとめており、後者は中国で出版する要請を受けて、1938年まで改訂を終えた。

一昨年、中国滞在中に、従来知られていなかった老舎の著作を発見し、そのことについて述べた一文を、『書林』（上海）に提出、日本文としては『老舎研究会報』第3号に発表、『老舎と西洋』が『復旦大学学报』（上海）の本年第6期に発表された。また、『文博士』の序文が老舎の文でないことを、老舎研究会にて口頭発表、近く文章化の予定。そのことにも関係して、中国における「編集」については例会でお話した（所報42号）。

語史関係では、「疑問と不定——朝鮮語への覚え書き」を発表（東西学術研究所紀要第19輯）したが、これは前回のテーマの報告の一部であり、朝鮮資料は今後も資料の整理を続ける予定。また、外国資料でもあり、北京語理解に不可欠の、満洲資料についても資料収集を進める一方、『清文指要』などについては、索引、訳注などの作業が進行中。

明治期における外来語

芝田 稔

(一) 「明治期における日中語彙の交流」をテーマ

として発足したのであるが、60年度遼寧大学への交換教授として出向するに当り先方より「日中両国漢字の異同について」意見を求められたのが契機となり、明治初期以来日本政府が行った漢字対策について、その歴史の変遷を調べたところ、日本の漢字政策は概ね漢字の削減に終始してきたことが明らかとなった。

(二) 中国では解放後、文教政策の一翼として「文字改革」が強力に推進され、その結果1964年までに2回にわたり合計2238字の漢字が簡略化された。そして小学校での漢字教育は、五年制で約3000字を目標としているので、小学校で教えられる全漢字のうち75%までが解放後に制定された「簡体字」である。以来、すでに20余年を経過しているため、この簡体字は定着したものと見做す外はない。一方、日本では文部省の「国語指導要領」によると、小学6年間に約1000の漢字が読めるよう指導しているのである。

(三) 最近になってまた「日中同文」という言葉が盛んに使われ、漢字を統一することの必要性を説く空気も出て来た。61年8月北京での国際漢語教学シンポジウムでも、簡体字非難が論議の一つになり意見を求められた。

(四) 日本語と中国語は言語体系を異にしているため、それを表記する漢字がそれぞれの必要に応じて簡略化された場合、後になってその同形統一化を望むことは不可能であり、不必要である。必要時は旧漢字を以て代行することができるからである。

近世における唐話辞書考

田中 謙二

〈近世〉とは江戸期をさし、〈唐話〉とは現代の称呼〈中国語〉が通常意味するところの口語、いわゆる白話をさす。唐話学の発展は、いうまでもなく長崎開港による白話文献の渡来と貿易に従事する通事の養成に因り、それがやがて辞書の誕生を促した。およそ17世紀末に始まり、18世紀をピークとする。辞書は元来、文献の読解と会話の学習という二種の目的に応ずる。唐話の場合、文献は(1)小説・戯曲、(2)禅家・儒家の語録、(3)明律を主とする法律文

書に分かれ、会話は渡来船の商人がすべて浙江・福建籍に属するため、対象は江南語ないし福建語が占める。ただ、二種の目的はあまりに懸隔するため、辞書もまた截然として二類に分かれる。

会話学習用の辞書の特色は、語彙の分類にみられる。(1)字画別、(2)古来の漢音別、(3)内容別(類書の分目に準ずる)のほかに、(4)字数により、2・3字より7・8字に及ぶ。(5)訳語の頭音によるいろは別がある。前者の三類では単語が占めるが、後者の二類は語から句・文に及び、辞書は会話書の様相を帯びる。(5)の分類には日華辞典の先駆が認められるが、文構造に近い用例をも、訳文の第一音で分類されると、利用価値が疑われる。しかも、文言における一種の文法書ともいえる助字(虚字)の解説書もない。唐話辞書の編者たちの、語法に対する配慮についての考察をまとめつつある。

現代における学術用語

鳥井 克之

学術用語、とくに政治経済学用語を対象として研究した。これまでに「日本・中国の専門用語の異同——経済学用語を素材として」(極東書店PR誌『書報』37号・61年4月)、日中両国の社会科学用語——その構造上の異同」(大修館『中国語』130号・77年二月)などを発表した。これと平行して同時に、ソ同盟科学院『経済学教科書』のロシア語・中国語・日本語の用語対照表(私家版)を作製し、これらを基盤として、現代中国のマルクス主義経済学の原典と言われる『政治経済学基礎知識』(資本主義篇)・(社会主義篇)を翻訳(立命館大学教授・松野昭二氏と共訳)して東方書店より、それぞれ75年5月と10月に出版した。

これらの成果を踏まえて、文革後の最近の中国における経済改革に見られる新しい専門用語に取組んだ。その具体的資料として、本学と姉妹校関係にある中国・遼寧大学学長馮玉忠主編『中国革命と建設的諸問題』の経済関係部分(第四章より第11章まで)を採用して翻訳した(邦文20万字強)。同書の他の部分、即ち政治史に関する九章は芝田稔教授が分担翻訳(邦文21万字弱)し、87年3月に訳注シリーズの一冊として出版される。なお巻末には事項索

引(鳥井が担当)を付するが、その索引カード作製を通じて、用語を収集した。次期年度に上述の調査研究結果を外来語研究の角度から総括して終結する予定である。

東西文化交流の研究

〈東西神秘主義の研究〉(神秘主義研究班)

思想・哲学・宗教における神秘主義と交流

A COMPARISON OF BUDDHIST AND CHRISTIAN MONASTIC PRACTICES

Morris J. Augustine

Summary of Research

The general object of my research on Zen and Buddhist monks was to use these concrete phenomena in order to attempt to disclose something the broad human dynamic of religious belief and religious institutions within the fabric of human societies.

Beginning with the presupposition that, both culturally and doctrinally, Buddhism and Christianity generally, and their monastic institutions in particular, arose in almost complete isolation from one another, this research project uncovered a lengthy list of very similar religious practices, virtues, and attitudes: things such as long daily periods of chanting, meditation, and prayer; of renunciation of money, of minimal use of food, clothing, money, and personal possessions, of sexual continence, of emphasis on obedience and humility, and the like.

In studying these parallels within the context of the historical record of Buddhist, Christian, and other monastic institutions in their respective civilizations, it seems clear that, from a purely social scientific and historical point of view, these monastic entities have embodied in a sort of rolemodel manner—albeit with many an ironically contradictory twist—those virtues, attitudes, values, and restraints which every human society finds necessary for its survival: in a word, *nonegocentric* actions, attitudes and modes of awareness.

Thus it would appear that every culture finds its own way into an appreciation and idealization of the beauty involved in seriously cultivating idealistic and utopian embodiments of patterns of behavior which tend to counterbalance the ineluctably egocentered biological drives of human

beings. In many cultures of both the East and the West it has been the monastic institutions which have been looked to as models of these essential modes of human acting and thinking.

西洋における神秘主義の比較研究

川崎 幸夫

神秘的経験を理解するためには比較研究といふ方法は不可欠なものとなる。西洋神秘主義はプラトン以来の形而上學を基盤とする哲學的神秘主義と、キリスト教とイスラム教における信仰の内面化に基づく宗教的神秘主義とに大別される。中世における神秘主義は魂の内的経験をとほして、哲學的神秘主義と宗教的神秘主義の接点を見出さうと努め、そこからいくつかの特色ある思想上の類型が生れた。筆者の課題はエックハルトに代表されるドイツ神秘主義を中心として、西洋神秘主義全體の比較研究を行なふところにある。それと同時に、神秘主義には東西に共通した地球的規模における経験の無差別的一體性といふことが見出され、新プラトン主義やドイツ神秘主義とヒンドゥー教や禪との類同性を明らかにすることも必要となる。このような研究の一指標として、筆者はこれまでドイツ神秘主義に関して論述した舊稿八篇を集め、昭和60年夏より大巾な加筆訂正を行い、昭和61年3月末に、關西大學出版部より、『東西學術研究所研究叢刊4』を『エックハルトとゾイゼ ドイツ神秘主義研究』という標題のもとに刊行した。

東洋における神秘主義

丹治 昭義

大乘仏教は神秘主義を更に一步すすめて、それを突き破った立場である。大乘仏教でいう覚りは従って最早単なる神秘主義的体験ではない。「生死即涅槃」(『仏教思想』9)は、大乘仏教中観派における覚りのあり方を考察し、それが生死と涅槃の同事性を端的に示すものであることを示した。また「チャンドラキールティの自立論証批判」(南都仏教 57号)は、覚りと論理の関係を考察し、神秘主義を超越した空の立場は、単なる非合理でなく、合理と非

合理、論理と非論理を超越していることを考察した。「中観派の菩薩観」(日本仏教学会年報)は、空・般若の実践においては智と悲が同事であることによって、起信が自己の覚りの原因であるだけでなく、自他平等の大乘の発菩提心であり、そこにおいては覚りと救済が同事であることを論じたものである。「鳩摩羅什の中論解釈」(哲学 12号)は、「諸法実相」論者である羅什が四縁説という因果律を否定して縁起という実相をどのように解釈したかを、『中論』第1章に従って考察したものである。この考察は、『明らかなことば』(東西學術研究所・訳注シリーズ)と共に、縁起即法性(実相)観を明らかにするための基礎資料となるものである。以上専ら大乘仏教初期の原則的立場を伝える中観派の思想的解明に絞って研究を行なった。

文学・芸術における神秘主義と交流

Kulturbeziehungen-Deutschland Japan

Detlef Schauwecker

Das in den letzten Jahren von der Tozai gakujutsu kenkyusho geförderte Forschungsgebiet der vergleichenden Theaterwissenschaft konnte ich in den Jahren 1985 und 1986 in zweierlei Hinsicht erweitern.

1. Einerseits wurde es auf den Zeitraum der letzten 100 Jahre ausgedehnt. Einflussgeschichtlich wurde ein Schwerpunkt auf die NS-Zeit gelegt (Adaptionen japanischer Dramen).

2. Andererseits wurde in der Japan thematisierenden deutschen fiktionalen Literatur dieses Zeitraums nach dem Japanbild gefragt. Die Aufarbeitung der deutsch-japanischen Kulturpolitik während der NS-Zeit fand hier eine besondere Berücksichtigung.

REPORT ON EAST-WEST STUDIES, 1985-1987

Scott Johnson

Most of 1985 and the first few months of 1986 were devoted to studies of Ernest Fenollosa's writings on Noh. A short paper was published in the journal of the Japan Fenollosa Society: "Fenollosa and the Staging of Noh", Lotus, No.

5 (Feb. 1985).

The Japan Chapter of the Ezra Pound Society undertook a major Project beginning in 1984. Fenollosa's extensive notes and draft translations of many plays are being prepared for publication in America by the University of Maine. My part in this project was to prepare transcriptions of the draft translations in Fenollosa's hand of two plays: *Kakitsubata* and *Nishikigi*. These transcriptions needed extensive notations, comparisons with the original Noh texts and in many cases commentaries for general readers unacquainted with Japanese history and culture.

Ezra Pound edited these manuscripts for publication in 1917 under the title '*Noh, or Accomplishment*', but Pound himself was limited in his understanding of the texts and of Japanese culture in general. As a result his editing, though often insightful, is sometimes mistaken. The publication, then, will also contain a comparison with Pound's version of these plays in the form of extensive notes referring to the New Directions edition of Pound's book, now known as *The Classic Noh Theatre of Japan*.

Work on these two plays was completed in the spring of 1986, although publication of the book itself is not possible until all the manuscripts by other scholars are completed.

A separate project is currently underway. Prof. YAMAGUCHI Seiichi, Saitama University, and I will co-author a biography of Fenollosa. Kodansha International has tentatively approved the book for publication, pending the availability of publication grants.

Japanese art history, especially of the late Edo, Meiji and Taisho periods, has long held a fascination for me. Within this time period book illustration offers a rich opportunity to observe changing styles and methods. As a part of continuing research in this area, I prepared a paper on one aspect of this broad field, which culminated in a paper published by the Institute: "The Artists Stretch Their Legs: The 'Sketch-Tour' Books and Other Developments in Japanese Graphic-Arts of the Early Twentieth Century", *Bulletin of the Institute of Oriental and Occidental Studies*, No. 19 (March 1986).

This article covers the shift in art styles from Shijo-Maruyama to the Western-influenced *yoga* art which became one of the main elements

of *Nihonga*. In addition, technical developments in printing were also discussed, especially the importance of lithography and the photographic reproduction of art in book and magazine publication.

近代文学論争譜——森鷗外の論理の再検討——

谷沢 永一

明治20年代の鷗外に、唐木順三が与えた「戦闘的啓蒙」という絢爛たる美称は、戦後期の風潮に乗じて定説化したようであるが、史上に果して鷗外の実像は、賞辞としての啓蒙家の名に値するであろうか。譬えば「審美学存亡の問題を謳い文句としながら、実は鷗外にとって枢要である筈の「審美学」とは、歴世の典籍を渉猟して成ったという建て前の、斯界の定本と認められるドイツ原書に、その本文に通暁することであった。しかも、その論旨をただの抽象的な型に嵌った理屈として、威嚇的に振りまわしてみせることであった。当時の読者の知らないヨーロッパ学界の“権威ある学説”を、仰山たらしく原語を散りばめながら、一方的に復唱してみせることであった。

この威嚇的な傲慢の内容空疎を、見事に暴きたてたのが高山樗牛である。従来の安易な文学史の定説では、坪内逍遙も高山樗牛も、鷗外との論戦に敗れたと見做されているが、実は両者に対して敗者であったのが鷗外であったという実相を、私は「近代文学論争譜」(『新潮』昭和56年4月以降連載)において論証し得た心算である。

こうして先ず鷗外の根本態度を見定めた上で、彼が東西の神秘主義思想を理解し得なかった所以を探り、その不幸な擦れ違いが近代日本の、以後の芸術思想を瘦せた細い流れに終らせた経緯を、実証的に辿り進めるのを今後の主要な課題とする。

W・B・イエイツの神秘主義の研究

名取 栄史

(1) この期間に公けにした研究成果は“T・ワイルダーの *The Skin of Our Teeth* と J・ジョイスの *Finnegans Wake*”で、これは61年6月28・

29日、妙高高原「国際日本研究所セミナーハウス」で開かれた『全国アメリカ演劇研究者会議』に於いて口頭発表したもので、現在公刊のために加筆訂正中である。その内容は、18世紀のイタリアの歴史哲学者G・ヴィーコの歴史循環説を根幹として、それに拠った前記兩作品、即ちワイルダー *The Skin of Our Teeth* とジョイス *Finnegans Wake* を比較検討しながら、ワイルダー劇の本質の論及に努めた。従ってイェイツを含むケルト文芸と神秘主義研究と必ずしも無関係とは断じ得ないと考え茲に挙げる。

(2) イェイツ研究に就いては、当該年度中に公表した論評の類いはない。ただ60・61年度、大学院博士後期課程「近代英米文学講義」（及び「比較文学研究」）に於いて、クフーリンを始めとするケルト神話伝説・民俗譚を材料としたイェイツ劇を取り上げ、その講義資料とノート類を整理し纏めている段階である。

ジュリアン・グリーンの神秘主義の研究

前原 昌仁

Le Voyageur sur la terre; Mont-Cinère; Adrienne Mesurat; Leviathan 等の1920年代の作品を主たる研究対象とし、「可視的な世界に対する無関心や不信が一層明瞭にあらわれてくる」中期の作品に先立つ特性を構成の面からアプローチしようと試みた。

時代的には両世界大戦間の「不安と平和」の時に位し、思想的にはカトリシズムの背景があるが故に Mauriac などに近いものを有しており、かつフランス文学の伝統から外れることなく、二十世紀文学の共通の命題——現実世界からの脱却の欲望, *ennui* の悲惨——をとりあつかっている。作家と現実世界との背馳が作中人物の夢と現実の倒錯となっており、この自己と外界との関係の不条理性は Mauriac の場合と同様に作中人物の内奥に深くわけ入り、作中人物とともに人生の意味をさぐっていくこととなる。Action や時間的な経過は二義的となり、まづ命題の提起となる。それは Adrienne の場合の墓場＝Mesurat 家に象徴される。次いで主人公を束縛

している副人物の登場が現実的障害となって筋が進行し、主人公の理想世界と現実世界がアンチテーゼとなって作品に象徴され、主人公の執拗な現実否定の意識は空想・夢となり、破壊的行為と云う結果となる。

綿密な創作の為のノートをとらなかったと云われているこの作家の作品は Action や時間の流、人物の登場等に空間の要素がどのようなかかわりをもって構成されているかを考察しようとした。

エズラ・パウンドの神秘主義の研究

安川 昱

昭和60年(1985)はエズラ・パウンド生誕百年の記念すべき年に当たったので、世界の各地で記念学会やシンポジウム、詩の朗読会、劇、オペラの上演、そして美術展など多彩な催しが行われた。

わが国でもいくつかの催しがあったが、なかでも最も重要なものは、本研究所のご協力を得て、筆者が組織責任者となって関西大学で開催された「日本エズラ・パウンド協会第7回全国大会」（昭和60年10月30・31日）と「エズラ・パウンド 講演とセミナーの会」（昭和61年2月27日）であろう。前者にはジェノヴァ大学のバチガルーポ助教授が、後者にはパウンドの息女メアリ・デ・ラッヘヴィルツが招かれた。同女史はまた、昭和61年3月1日、本研究所で、『エズラ・パウンドと孔子』という演題のもとに特別講演を行い聴衆に感銘を与えたが、筆者はその通訳をし、学ぶところが多かった。これまでパウンドにおける儒教をパウンドの神秘主義という視点からとらえることができなかったが、デ・ラッヘヴィルツ女史のこの講演、同女史滞在中の共同研究を通じて、パウンドにとって青年時代から晩年に至るまで儒教が如何に大きな意味をもっていたかを識ることができた。

昭和61年度は、前記の余波を受けて研究テーマに則した研究成果の発表を行うことはできなかったが、デ・ラッヘヴィルツ女史並びに前記のマシモ・バチガルーポ氏との共同研究によって、パウンドの神秘主義研究の重要な手掛りを得ることができた。

〈東西化交渉史の研究〉（文化交渉史研究班）

『諸蕃志』の研究

藤善真澄・藤本勝次

ここ数年来、南宋の趙汝适撰『諸蕃志』の訳出、及び註の作成に従事してきたが、その成果の一部は、訳注のための通読を語彙索引（昭和57年東西学術研究所紀要第15輯）として発表した。これ以降、本格的な訳注作業に入り、昨年度までに、和訳をほぼ完成したものの、不明の部分、再考を要する箇所が多く残されており、相互比較、校合、語彙用法を統一するため、本年度より訳文の再検討を進めている。

一方、右作業と並行して『諸蕃志』の英訳ヒルト・ロックヒルの“CHAU JU-KUA”と比較し、訳出の出入を明確にすべく、これまた来年度までに完了する予定である。

以上の訳文作成と表裏一体をなす註文の作成は、本研究の一大特色をなすものであり、訳語の註のみにとどまらず、本書に採録された諸国にかんする研究史を付すること、及び本書が著わされた南宋以前の、諸国にかんする資料を、龐大な中国文献より蒐集して掲載しようとするところにある。研究史は定説、異説、問題点を明確にしてあり、今後の研究に裨益するところ大であろうと確信しているが、中国文献とりわけ雑著より集めつつある諸資料も、学界に資する貴重なものとなろう。鋭意いま、作業を進めているところである。（藤善真澄）

技術伝播の研究

綿繰具の調査研究

角山 幸洋

今年度の綿繰具の調査は、37点を実測調査（過去からの通算は100点、実測表参照のこと）、それとあわせて今年度は20点を、同時に観察調査することができた。これらの資料は、できる限り多くの資料を集積することにより、情報が得られるので、今後においても、文献の収集とともに実測調査をする予定である。この調査は、海外のものでは国立民族学博物館の収集品、国内では、近畿地方を主として関東地方の収集品を、民俗博物館・郷土館など、所蔵

者のご好意により実測調査することができた。その結果、大攪車と小攪車の二つに分類することができ、このうち小攪車については、東日本型と西日本型とに分けることができ、その使用の北限は米沢地方におよぶが、南から持ち込まれた形跡のある形式をとり、またそのおもな商品化した製作地は、愛知県一宮、兵庫県加古川で、それぞれ綿栽培地へ送られた。なお関東地方の製作地については、まだ明らかでないが、埼玉県行田がわかっている。なおこのような綿繰具は、明治以後、綿繰機械の出現とともに、消滅することになるが、第二次大戦のとき、衣料不足から、木綿への回帰現象がおこり、ふたたび使用をみることになる。保存されているもののなかには、昭和16年当時のものが多く、そのとき復活したものとみられる。

なお詳細な調査研究の結果は『紀要第20輯』に掲載してあるので、それを参照されたい。

煉瓦造建築の研究

山田 幸一

わが国の建築は、歴史的に見て、木造架構式構造が主流を占め、組積式（石造・煉瓦造等）は、明治開国後関東大震災に到るまでの僅々60年間に流行したに過ぎない。世界には組積式が主流、またはそれと木造が併存している地域の多いことを思えば、わが国のそのような状況は極めて特異である。この点に注目して、わが国で組積式の流行しなかった理由を究明すれば、それはとりもなおさず日本建築の特徴を探る一つの手がかりとなろう。本研究では幕末から明治期にかけて煉瓦造建築等の導入された過程と材料の供給状況、当該期間に建てられた主要遺構についての実態調査、及びその消滅に到るまでの経過等を考察する。わが国で木造が主流を占めた理由⁽¹⁾、近畿地区における初期の組積式建築の実態及び材料の生産状況⁽²⁾については、既に一部発表済である。本年度以降は近畿地区以外の遺構や材料につき、時期を幕末まで遡らせて調査研究の予定である。

(1) 『日本土嚙的特点』1985・11 生土建築国際会議（北京）

『図解日本建築の構成——工法と造形のしくみ——』1986・2 彰国社。

(2) 『第1煉瓦創立とその技術の系譜——国産煉

瓦製造史の研究 2 ——』1985・10 日本建築学会
 会学術講演梗概集（共著）

日・中・欧間陶磁器貿易の研究

大庭脩・安川昱・C. J. A. Jörg

毎週火曜日に定期的に会合し、委嘱研究員 C. Jörg 氏の著の“Porcelain and the Dutch China trade”回読、訳出を行ない、その三分の二を終えた。
 （大庭 脩）

ウサーマの『回想録』の研究・翻訳

藤本勝次・池田修・梅田輝世

本研究所の「訳注シリーズ」の中で、昭和51年に『シナ・インド物語』、昭和53年に『インドの不思議』の2つのアラビア語文献を出版してきたが、その後で、アラビア語古典を読む会を設け、在阪のアラビア語研究者や同好者に呼び掛け、その参加のもとに本研究所内で研究会を始め、現在も続けてい

る。その間に、ウサーマの『回想録』の翻訳・刊行を計画し、昭和60年度に大阪外国語大学アラビア語科主任の池田修教授と梅花女子短大の梅田輝世教授に研究員を委嘱し、その作業を始めた。ウサーマは本研究所「所報第43号」で紹介しているように、十字軍時代のシリアにおける一アラブ城主で、十字軍と直接戦った人物であり、その『回想録』はこの時代のアラビア語史料として貴重なものである。

池田研究員はアラビア語史研究の専門家としての立場から、『回想録』のアラビア語を文法的に研究し、梅田研究員は十字軍時代のシリア・エジプト史の研究者として、その史的価値を分析した。たまたま、大阪外国語大学の客員教授として、昭和55年から59年まで来日していたカイロ大学文学部教授タッリーマ氏が『回想録』の研究会に参加し、我われは教授から貴重な助言を得たことを付記しておく。61年度の前半は原稿の整理と出版準備に費し、後半は印刷に入って、それに関連する作業を行った。
 （藤本勝次）